

郷土研究

岐阜

第143号

地域に息づく文学の風土

—「書かれた「この地」を読む

みのかもブックマーク」の連載と展示

和歌 由花

美濃加茂市民ミュージアムでは毎年『広報みのかも』で一頁分のコラムを担当し、毎月学芸員が記事を執筆している。テーマは毎年異なるが、二〇二二年五月から翌年四月の間は「書かれた「この地」を読む—みのかもブックマーク」を連載した。これは江戸時代から現代にかけて美濃加茂市域を訪れた文人・画人が見聞きし書いた本を紹介する内容であった。

作品は、書かれた地点の特定が可能なもの、歴史的裏付けができるものに限定した。連載紙面には、学芸員の視点から選んだ、記事に関連する当館所蔵の歴史資料の写真や現地の風景も掲載した。当館には地域の時代背景や周辺情報に関する資料と調査の蓄積がある。単体では情報源として断片的な資料も、文学と結び付けば人の営みの証となる。一方、資料は視覚的リアリティを加味して本の世界観を膨らませてくれる。資料と文学に血の通った関係性を構築できるのは、地域博物館で文芸を扱う利点である。

作品の著者は旅人の視点、居住者の

目線など様々な見地から、当時の人々の暮らしや自分の心象、この地の歴史や文化的な特色を良くも悪くも描出し、時には評価する。文学にはその性質上、フィクションや個人的主観が見え隠れするものだが注意して読み解けば、当時の市域内外の人の目に「この地」がどう映っていたかを知る有効な手段となる。そもそも文学に書かれた場所や風景が身近にあること自体が誇るべき文化的な財産である。その事実を市民に発信する意義は深い。

一般的に本の紹介なら、図書館か文学館の業務となるだろう。しかし文学館を持たない美濃加茂市では、市立図書館と市民ミュージアムが郷土の文芸の普及に取り組む。博物館では地域出身の文学者・坪内逍遙と歴史学者の津田左右吉、この地に没した岡本一平などを常設展示や企画展で紹介してきた。歴史や美術の調査で結果的に文芸の範疇に足を踏み入れた事例もある。

実は今回紹介する連載も「鉄道のまち 美濃太田駅開業から一〇〇年」展で美濃太田駅が登場する文学作品を調

査したことが契機となった。まず『岐阜文学全集』小説篇主六巻（郷土出版社、一九五五年）道下淳著『濃飛文学百話』上・下（株式会社岐阜新聞社、二〇一七年）等を参照し、新たに発見した本も加え、計十三冊を展示した。この探索中に美濃加茂に来た文人・画人の随筆や紀行文を多数発見できた。

それに加えて近年、市ではレファレンスサービスの充実を目指して博物館員と図書館員が情報共有する会を開いているが、その時に司書たちが教えてくれた本の存在も有益な情報となった。連載終了後には、採り上げた本と歴史資料の現物を紹介する展示を行った。限られた紙面で伝え切れなかった取材の成果や他の資料も提示した。また著者が訪れた場所の現在の様子を撮影した風景写真も映写した。時代が下り、建物や景色が変化しても、ここに文学の風土が息づくことを伝えたかった。

閉会後、この連載と展示記録をまとめた冊子を作成した。今後も地域の文芸や美術、歴史など領域を横断する調査や展示を継続したいと考えている。

（当会委員・美濃加茂市民ミュージアム）



冊子の表紙
2024年3月発行
A4版 16頁

目 次

巻頭言 地域に息づく文学の風土 ―「書かれた「この地」を読む みのかもブックマーク」の連載と展示	和歌 由花 1
はじまりの美濃之國 邪馬台国時代の風景	赤塚 次郎 2
西濃の御鑑祭の流行 その二	清水 進 8
岐阜県庁から岐阜県立図書館への文書移管について ―飛騨郡代高山陣屋文書・美濃郡代笠松陣屋堤方役所文書・明治期岐阜県庁事務文書の移管過程―	入江 康太 12
『瑞穂市史』の編さんを終えて	北村 厚史 16
心に留めた美濃加茂の風景―歴史と文化の積層として	和歌 由花 19
地区情報	
(岐阜)内堀 信雄 (可茂)栗谷本 真	21
郷土関係新刊書目録	22
郷土関係逐次刊行物文献目録	26

郷土研究・岐阜 第一四三号

令和7年3月20日 発行

編集・発行 岐阜県郷土資料研究協議会

(会長 早川万年)

岐阜市宇佐四―一 県図書館内

電話 〇五八―二七五―五一一

FAX 〇五八―二七五―五一一

E-mail kyoshike@library.pref.gifu.jp

銀行振込 大垣共立銀行県庁前支店

(普) 289660

郵便振替 00860-0-41220

普通会員 2800円

賛助会員 4000円

(印刷 浅野印刷株式会社)